

四旬節黙想会「御父のいつくしみ」

指導・講話 パトリック・カストロベルデ神父
(堺ブロック所属、淳心会司祭)

2016年3月6日（日）、主のご復活を迎える準備として、四旬節黙想会が行われました。

まず全員で「主の祈り」と「いつくしみの特別聖年のための祈り」を唱えたあと、カストロベルデ神父のご講話をうかがいました。お話の内容を、以下に要旨としてご紹介します。



「いつくしみの特別聖年」にあたり、今回の黙想会のテーマには「御父のいつくしみ」という言葉を選びました。サブタイトルは、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなた方も憐れみ深い者となりなさい」という、ルカ6章36節の一文です。これは「いつくしみの特別聖年」のテーマになっています。この言葉は、簡単に言えば、神の子どもとなるための根本的な条件です。教皇による『イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔』という大勅書には、大切なものがたくさん書かれています。読んで分かち合い、皆さんといっしょに実際の自分の生活で実践する必要があると思います。

この「あなたがたの父が憐れみ深いように」という言葉は、御父の性質です。私たちは、その御父の憐れみをひたすら祈り求める必要があります。父に許されたものとならせていただいて、愛を受けましょうという、強い呼びかけです。このモットーは、御父にまず倣い、そして人を裁かず、罪に定めず、むしろ愛とゆるしを限りなく与えること、そうしたいつくしみを促しているのです。

では、この御父の、神のいつくしみとは、何でしょうか。フランシスコ教皇の『父のいつくしみのみ顔』には、「いつくしみは喜びの源」「静けさと平和の泉」であり、「私たちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人が一つになる道」と書かれています。神さまのいつくしみ

があるからこそ、救いも感じる事ができるのです。そして、喜びも、愛も、日々の生活の中で体験して強く実感できると、私は思います。

いつくしみの特別聖年は、やはり、神さまのゆるしといつくしみを、改めて体験するための時です。人生を変えるチャンスを与え、心を変えてくれる時ですね。

神のいつくしみをもう一度体験するために、教皇は巡礼に行くように呼びかけておられます。巡礼によって回心を促され、聖なる門をめぐり神のいつくしみに抱かれましょう、と。また、教皇が呼びかけておられるのは、「ゆるしの秘跡」です。ゆるしは、新しい命によみがえらせる力、希望を持って未来を見つめる勇気を与えるもの、いつくしみの偉大さに触れさせてくれるものです。その体験は回心の始まりなのです。

また特別聖年の間に、「慈善のわざを行うことによって自己疎外を克服する」ことが奨められています。「具体的な慈善のわざ（物質的・社会的支援）」と「精神的な慈善のわざ（助け、教え、ゆるし、忠告し、祈ること）」です。難しいとは思いますが、できる範囲で、助けを必要としている人々、「小さい者」（マタイ25章40節）に、少しでも分かち合いたいと思います。

そういう呼びかけに忠実に応えることができますように、神さまの力が必要だと、私は思っています。

(要約作成：編集者)